

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：26401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730439

研究課題名（和文） ストレngths視点に基づく知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築

研究課題名（英文） Development of collaborative assessment methods in strengths perspective with people with intellectual disabilities.

研究代表者

西梅 幸治（NISHIUME KOJI）

高知県立大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：00433392

研究成果の概要（和文）：

本研究では、ソーシャルワークにおけるストレngths視点に基づき、知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築を目指して、理論に基づく実践方法の具体化に向けて検討を行ってきた。まず理論的な側面については、利用者のストレngthsに基づくエンパワメント実現に向けて、エコシステム視座と社会構成主義の包括・統合的な考え方が主な基盤になることを理解した。そしてその理論的側面からのストレngthsに基づく協働アセスメント方法と、アセスメント局面で活用可能な支援ツールの開発と活用方法について体系化を図った。

研究成果の概要（英文）：

This study aims at establishing the theory-based practice method of the collaborative assessment in strengths-based social work practice with people who have intellectual disabilities. About the result at first, in order to facilitate the empowerment in strengths approach with clients, the theoretical framework of the practice is mainly consisted of holistic integrated characteristics in ecosystems and constructionist perspectives. In addition, by utilizing this framework and the computer-assisted tool developed, this study could promote to establish strengths-based collaborative assessment methods.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：社会福祉関係

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「ストレngths視点に基づく知的障害のある人との協働アセスメント方法の構築」をテーマに進める。知的障害のある人をめぐる近年の動向としては、地域自立生

活とそのための支援が重視されていることが挙げられる。その動向下でのソーシャルワークには、利用者本人が主体性を最大限に発揮できるような生活支援の方法が求められる。そしてその方法として、ストレngths視

点に基づくソーシャルワークが昨今注目されている。

利用者への支援にストレングス視点が求められる背景には、かつてこの領域での実践が専門家主導の処遇や援助であった経緯がある。専門家が「障害」を定義し、その障害を改善できるように治療や訓練の方針を立て、施設収容という方法で専門家が適切と考える生活スタイルを提供してきた。この実践により、当事者自身の生活への考え方や自己決定によって生活スタイルを築いていくという権利が損なわれてきたのである。そのためストレングス視点に基づき、当事者の権利擁護とエンパワメントを図る支援方法、特にアセスメント局面での展開方法を確立することは喫緊の課題といえよう。

2. 研究の目的

本研究では、ソーシャルワークにおいて近年重視されているストレングス視点に着目し、知的障害のある人との実践に適用して研究を進める。その視点に基づき特にアセスメント局面で、知的障害のある人とワーカーとの協働による実践展開を可能とする方法論を構築することが本研究の目的である。加えてこの協働アセスメント実践への具体化を、コンピュータ支援ツール（以下、支援ツール）の開発・活用によって図り、実践で活用可能な方法について検討していく。そこで本研究では、当事者が協働してアセスメント局面を展開することを協働アセスメントと称し、その方法構築に焦点化して検討していく。具体的には理論をふまえ、実践に応用可能な方法論の確立を目標に、次の点について段階的に検討し、明らかにする。

(1) 理論

ストレングス視点に基づくアセスメント展開に向けての理論的視座（エコシステム視座、社会構成主義、エンパワメント、ストレングスなど）の整理と確立

(2) 過程

当事者とソーシャルワーカーとの協働関係による過程展開の追究（ストレングス視点に基づく協働アセスメント局面の展開過程の深化

(3) 技法

過程を展開する技法の明示（解決志向アプローチやナラティブアプローチなどを取り入れた対話技法などの理解）

(4) ツール

対話を促進する支援ツールの開発（開発段階からの当事者参加を図るとともに、よりアセスメント場面での協働を図ることができる支援システム開発）

(5) 検証

実践場面で支援ツールを活用した協働アセスメント方法の検証とその蓄積

以上を通じて、支援過程におけるソーシャルワーカー主導の展開を可能な限り、当事者主導の展開へと移行しながら、実践に活用可能な方法論として昇華していく。

3. 研究の方法

本研究は、支援ツールを活用した協働アセスメントによって、利用者が自身の生活理解や潜在化しているストレングスへの気づきを促進することを目指して、

(1) 理論研究

(2) 実践へ応用可能な支援ツール開発と検証

の2側面から行った。具体的には、以下のような内容により実施した。

(1) 理論研究

協働アセスメント方法構築に向けての理論的整理と支援ツールの開発を視野に入れ、

① ソーシャルワーク理論（エコシステム視座、社会構成主義、エンパワメント、ストレングス視点、アセスメントなど）

② アセスメント過程や技法（協働アセスメント展開過程、対話技法、解決志向面接技法、ナラティブアプローチなど）や障害者福祉実践における技法（TEACCHなど）

③ 障害者福祉（当事者の生活世界、障害学など）や支援ツールに関連する情報科学（特にコミュニケーション促進のプログラムなど）

についての文献研究による協働アセスメント方法の理論的背景の整理を行った。

(2) 支援ツール開発と検証

支援ツール開発と検証に関しては、

① 情報科学（数量化やシミュレーション方法、視覚化に関する知識の獲得）や調査方法（質的・量的調査法など）に関するレビュー

② 当事者の生活状況をデータ化するための質問項目精緻化に向けた先行研究レビュー（知的障害のある人の生活世界を理解するための指標や枠組み、内容項目など）

③ 当事者や知的障害者関連施設職員などへのインタビュー調査の調査デザイン作成と実施

④ アセスメント促進に向けた効果的なプログラム開発の検討

⑤ 支援ツールの活用に関する検証（改良を重ねた支援ツールの試用）

などを進めた。

なお本研究は、高知女子大学社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号第184号 2010年7月26日）。

4. 研究成果

ソーシャルワークにおけるストレングス視点に基づく実践は、エンパワメント実践過程の中核として考えられる。そのためまずエンパワメント実践過程に関する研究をとおして理論的整理に努めた。

具体的にはまず、エンパワメント実践の主要な理論的課題の一つである理論的枠組み、すなわち perspective の整理である。そこで、エンパワメント実践の特徴を整理し、その perspective に関して検討を行った。その結果、エコシステムと社会構成主義が基盤となる perspective であることを導いた。そしてソーシャルワークにおける両者の特徴を挙げながら、それらの perspective としての特性を、太田 (1992) のエコシステム視座の特性を明らかにするためのシステム思考と生態学的視座の特性比較をもとに、(1) 基礎的特性、(2) 方法的特性、(3) 包括・統合的特性から分析・考察した。その結果が以下の表 1～3 であり、両 perspective の特性を包括・統合化することによって、エンパワメント実践を形成する枠組みを提案できることを明らかにした。

表 1 基礎的特性

エコシステム (システム思考) —— (生態学的視座)		社会構成主義 (社会構成主義的見解)
組織工学	生物学	社会心理学
論理性	実証性	実践性
人為性	自然性	物語性
超自然事象	自然事象	言説事象
組織体	生活体	構成体
没価値志向	価値志向	多価値志向
関係概念	状況概念	転換概念
ハード	ソフト	ソフト
不可視性	可視性	非可視性
思考性	感覚性	認識性

表 2 方法的特性

エコシステム (システム思考) —— (生態学的視座)		社会構成主義 (社会構成主義的見解)
統合性	統一性	統御性
分析性	全体性	構築性
説明概念	実体概念	了解概念
構成	素性	差異
構造機能	変容過程	意味生成
形式	内容	解釈
多様性	単一性	多義性
静態	動態	実態
ミクロ	マクロ	ミクロ
抽象性	具象性	具現性

表 3 包括・統合的特性

エコシステム視座	社会構成主義的見解
ワーカーの専門知	利用者の知
人：環境図式	物語図式
観察	解釈
客体	主体
状況認識	認識転換
構造・機能	意味
変容過程	生成過程
生活構成の関係性の把握	関係性による生活の構成
目的志向性	価値志向性
均衡維持	脱構築

次にソーシャルワークやエンパワメント実践に関連する文献を中心に、まずケースワークの歴史的動向からソーシャルワークの独自性である人間と環境の理論的視野が確立してきた経緯の概要をおさえ、今日のエコシステム視座を基盤としたソーシャルワークの特性と実践原理を整理した。この特性を表わす中心的な概念であり、基本となる実践原理として太田 (2008) は 3 つの概念を挙げ、ソーシャルワークの特性を「生活支援過程」としてまとめることができると指摘している。この 3 つの概念は、まず「生活」について人間理解への価値意識と姿勢から、その生活を人間と環境さらに時間と空間から独特な経験や事実で構成されるその人固有の世界 (cosmos) として理解する意図をもつことが指摘されている。そして「支援」については、利用者自身とその特殊な生活状況理解に立脚した方法を重視した概念であるとし、利用者の生活コスモスで自らのもつ問題解決能力を育み自己実現へと進展する過程に、支援者として参加・協働する姿勢と態度、方法と技術を示すことが述べられている。最後に「過程」については、生活を焦点にした参加と協働からなる利用者と支援者との支援関係が、科学的・専門的な方法にて計画的に推進されていくこととして理解し、その過程を重視することが強調されている。

ソーシャルワークにおけるエンパワメントの実践過程を深化していくためには、この特徴をふまえてさらにエンパワメント実践がどのように展開されているのかを把握していく必要がある。そこでエンパワメントの原理や原則が記述されている先行研究を参照しながら、さらなる具体化を進めた。原理や原則から検討していく理由は、例えば Lee (2001: 59) が原理について、アプローチの構造を決定し、ソーシャルワーカーに開かれた行動の選択範囲を定める制約を含んでいることを指摘している。特にエンパワメント

に関する原理については、抑圧の状況について考え、関係を形成し、批判的思考や習慣、意識的高揚のようなエンパワメントへの支援過程を扱う際に私たちを導いてくれることを同時に述べているからである。

このような原理や原則は、多くの研究者によって指摘されているが、そのなかで主要なものを抽出した。そして原理・原則とそれが示されている先行研究の文脈をもとにカテゴリー化を行った。具体的には、各原理・原則を特徴ある要素ごとにコード化し、その内容を類似性に添って抽象度を高め、カテゴリー化した。その際には、ソーシャルワークの実践原理である生活・支援・過程を意識し、基本特性を抽出できるように分析を行った。その理由は、エンパワメント実践がソーシャルワークの1アプローチであり、その側面から諸特性を理解することで、ソーシャルワークにおける位置づけと独自性が明らかになると考えたからである。分析の結果、8つのカテゴリーが抽出できた。

生活：

- (1) 個人から社会までのニーズを見通し、生活全体に関わる
- (2) 利用者の内省を通じた現実理解を尊重し、決定を促す

支援：

- (1) 利用者に対して尊重・貢献する姿勢で取り組む
- (2) 利用者主導でワーカーの支援を統制する
- (3) パートナリシップ関係によりパワーを共有し、協働する

過程：

- (1) 利用者の成長・変容に向けて支援過程をとおして協働する
- (2) 利用者がストレングスに着目し自身と環境を変えていくために行動する
- (3) 利用者個々の問題から社会改革までを視野に入れて実践する

このようにみていくと、エンパワメント実践過程において、利用者のストレングスを見出し、エンパワメントを促進するためには特に、

- (1) 利用者自身の生活理解
- (2) 利用者自身のストレングスの認識
- (3) 利用者とワーカーの協働
- (4) パワーに基づく行動化

が重視されるといえよう。ストレングス視点は、通常、異常に関わらず状況と変化への可能性に対処する能力を高めることに焦点化すると指摘されている (Timberlakeら 2008)。すなわち個人、家族、コミュニティが直面するあらゆることは、状況や抑圧、トラウマによって打ち砕かれ、歪められたとしても、それらの能力、才能、コンピテンス、可能性、洞察力、価値観、希望に照

らして理解していくことができることを示している (Saleebey1996)。このような先行研究とエコシステム視座と社会構成主義的見解の包括・統合的特性をふまえ、利用者のストレングスを利用者自身の自省による肯定的な意味づけとして理解した。そして、その生成過程がエンパワメント促進の基盤となるため、ストレングスをアセスメント局面で認識していく技法について分析し、解決志向アプローチやナラティブアプローチなどを含めた実践技法の検討を行った。このような考え方と技法に基づく局面を協働アセスメント方法による展開過程と位置づけた。加えてアセスメント局面で有効性が期待されているエコシステム構想に基づく支援ツールに着目し、その改良・開発を活用方法も含めて行った。

そのプロセスでは、支援ツールに導入する生活構造とその機能をアセスメントする質問項目に関して、就労継続支援事業所に勤務する利用者のストレングスを見出し、エンパワメントを促進するバージョンの作成を検討した。まず ICF や QOL などの指標や、ストレングスアセスメント、知的障害のある人のためのアセスメントにおける項目、社会生活力やソーシャルスキルズトレーニングなどの先行研究より、利用者の生活・支援構造を把握するためのアセスメント指標を整理した。そのうえで知的障害のある人の語りから生活状況を理解するためにインタビュー調査を実施し、利用者の生活の実感や実態からなる意味を把握した。これらの統合的分析に基づき、知的障害のある人の生活世界や生活を支援するためのアセスメント指標、ストレングスを整理し、生活の諸要素とその関係性が安定的に維持されるパターンを示すように配置、生活を人間と環境の各側面から分類・整理することを通じて、部分から全体までを系統的に構成した。

そのシステム構成の結果は、まず包括・統合的な実体としての (1) 生活から、(2) 領域として自分と環境とに2分割し、その両側面から利用者のストレングスを認識できるように構成した。そしてそれを (3) 分野として特性・基盤・周辺・支援とに4分割した。またそれらを (4) 属性として個性・能力・スキル・活動・身の回り・身近な人・支援者・サービスに8分割し、さらに (5) 内容として32分割することで、ストレングス視点からの協働アセスメントを実施するための生活内容の指標として配列した。項目名には、利用者との協働による活用を意識して、インタビューによって語られた知的障害のある人に理解しやすい言葉で、できるだけ整理を試みた。さらに32項目の内容特性を示す指標の各下位にそれぞれ、その項目を明らかにする質問と回答選択肢を付加した。その

質問は、知的障害のある人のエンパワメントの観点から意識・状況・資源・取組という要素におきかえて質問と回答選択肢づくりを行い、その回答から利用者のストレングスを認識できるように作成した。そしてツール上に利用者自身の認識している生活をレーダーチャートや棒グラフなどで視覚的に外在化し、利用者と職員による対話を可能にしながら、利用者の生活やストレングスへの自省を促す。そのことをとおして、ストレングス視点からの協働によるアセスメント局面を展開する1つのツールとしての機能を内包させた。

またそのツールをコンピュータに導入する際に、タッチパネル形式で利用できるものにインストールし、その活用しやすさも検討した。この支援ツール開発に関しては、関連する研究会への継続的な参加と、就労継続支援事業所や知的障害者関連施設職員などへの聞き取りを通じて、ツールを介した協働アセスメント方法と試用について検討した。そこで得られた意見をもとに、支援ツール手順マニュアルの作成を行い、協働アセスメント局面過程に応じた活用方法と技法、支援計画作成への情報提供の例示などを示した。

しかしながら課題としては、

- (1) ツールを利用した支援の説明方法
- (2) 回答のしやすさへの工夫
- (3) 統計的な観点からのさらなる精緻化
- (4) 障害程度による活用方法の明示

などが提起された。

以上を通じて、ストレングス視点に基づくソーシャルワーク方法論を理論から実践までを見据えて構築していくことを可能にしてきた。加えて先行研究をふまえ、知的障害のある人の語りに基づき、その生活実態に迫る支援ツールの改良・開発を行い、かつ開発段階から当事者協働の機会をつくり出すことで、協働によるソーシャルワーク方法論の提案をしてきたことに本研究の意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 西梅幸治「ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性—生活・支援・過程に着目して—」『高知県立大学紀要』(査読有) 61, 2011, 69-84.
- ② 西梅幸治「エンパワメント実践におけるperspective特性の検討—エコシステムと社会構成主義に焦点化して—」『高知女子大学紀要』(査読有) 60, 2010, 65-82.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西梅 幸治 (NISHIUME KOJI)

高知県立大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：00433392